

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：34205

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26350801

研究課題名(和文) スポーツにおける女性指導者登用促進のための「内なる壁」の解析

研究課題名(英文) Investigation regarding Promote the Appointment of Female Coaches in Sports

研究代表者

佐藤 馨 (Sato, Kei)

びわこ成蹊スポーツ大学・スポーツ学部・准教授

研究者番号：50326592

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：【目的】本研究は、スポーツ系大学生の指導意欲とジェンダー意識の実情を明らかにし、女性スポーツ指導者の登用促進の資料を得ることを目的とした。【方法】スポーツ系A大学3年生に無記名式調査を実施、277名から回答を得た。【結果・考察】男女比は男子74%、女子26%。性別とスポーツ指導に対する自信との関連は、女子の得点が男子よりも有意に低く、女子はスポーツ指導に自信がないことが分かった( $t(120)=5.68, p<.001$ )。さらに性別とジェンダー意識との関連は、男子の得点が女子よりも有意に低く( $t(120)=4.54, p<.001$ )、男子は性別に対する平等意識が低いことが示唆された。

研究成果の概要(英文)：[Objective] The objective of this study was to examine sex role attitudes and coaching efficacy in college students for sports science, and to provide a basis on which to promote the appointment of female coaches in sports.[Methods] The study's research was based on a focus group of junior college students ( $n=277$ ).[Results and Conclusion] The responding students represent male (74%) and female (26%). The coaching efficacy scale had a significant relationship with male and female students ( $t(120)=5.68, p<.001$ ). We found that female students were low-coaching efficacy and had no confidence. The sex role attitudes scale had a significant relationship with gender. It was suggested that male students were low-sex attitudes and the gender equality were lower than female students ( $t(120)=4.54, p<.001$ ).

研究分野：スポーツ社会学

キーワード：女性指導者 登用促進 男性指導者 社会心理的要因 コーチング効力感 性役割態度

### 1. 研究開始当初の背景

近年、競技スポーツの場面で活躍する女子選手を目にする機会が多くなったが、これは女子選手のオリンピックにおける参加率とも関連することは容易に推測できる。オリンピック開催当時から約 50 年もの間、女子選手の参加率は 10% 以下と低い水準であったが、100 年後の 2008 年北京オリンピック大会では 42% を占め、2012 年ロンドン大会に至っては女子選手が男子選手数を上回り(男子 137 名、女子 156 名; JOC 発表)、次回リオデジャネイロ大会ではさらに女子選手の活躍が期待できると予測される。

一方、そうした女子選手を裏で支えるスポーツ指導者の男女比はというと、残念ながら選手に及ばないのが実情である。例えば、2004 年の JOC 調査によれば加盟団体における登録スポーツ指導者の男女比はおよそ 8 対 2 であり、圧倒的に男性スポーツ指導者が多かった。さらにこうした状況は JOC 加盟団体のスポーツ指導者に限られたことではなく、2009 年の滋賀県下の調査においても、JOC 同様、男性スポーツ指導者の割合が多く、男性約 8 割、女性約 2 割という結果であった(佐藤, 2009)。このように女子選手の活躍が目覚ましい反面、女性スポーツ指導者の比率が伸び悩むのはなぜであろうか。

イギリスのトップアスリートを指導する女性を対象にした研究によれば、本来、スポーツ指導者の仕事内容や方法が女性を不利な状況に置くように出来ていると指摘し、さらに女性スポーツ指導者数が増加しない理由として「女性の指導機会の少なさ」「競技団体の支援の少なさが引き起こす疎外感」「女性に対する指導者教育システムの欠如」をあげている

(Leanne, 2008)。さらに Leanne (2008) は、女性スポーツ指導者が高いレベルを目指そうとする場合、レベルが上がれば上がる程その道筋は狭まり、そのため女性は重要なポジションから除外されることを明らかにした。すなわち、女性がトップアスリートを教えるスポーツ指導者を志したとしても、現在の環境ではそれを実現するのは至って困難な状況にあると言える。

また、女性スポーツ指導者が増加しない理由を Kilty (2006) は次のように指摘している。女性スポーツ指導者には障壁あり、一つは「外的障壁」、もう一つは「内的障壁」である。「外的障壁」は、女性スポーツ指導者と男性スポーツ指導者ではそもそも指導評価の基準が異なり、それは男性スポーツ指導者に有利に働くことが分かっている。このように「外的障壁」の存在は、女性スポーツ指導者が育ちにくい環境をつくり出すのである。しかしながら一方で、Kilty (2006) は女性スポーツ指導者の内面、すなわち「内的障壁」についても指摘している。「内的障壁」とは、女性は大望を掲げず、自信がなく、自ら名乗りを上げようとせず、一步踏み出すべき時に引いてしまうといった女性自身に内在する心的障壁を指しており、これを打破しない限り女性スポーツ指導者の登用数も活躍の場も増えないことを示唆した。こうした傾向は社会心理学の研究でも同様の結果を示しており、女性は日常的に自分を過小評価し、自分の業績を実際よりも低く見積もる傾向があるのに対し、男性は自分の業績を高く見積もる傾向があると言われている (Daubman, 1992; Heatherington, 1993)。すなわち、女性にとってよりよい指導環境が整備されたとして、そこに彼女らが積極的に関わる姿勢

を示さなければ、あるいは主体的にスポーツ指導者の地位を獲得しようとしなければ、女性スポーツ指導者の登用数を押し上げることはならないと言えるのではないだろうか。例えば、順天堂大学(2012)の調査によれば、現役の女子選手が考える引退後のセカンドキャリアとしてスポーツ指導者を望む者が全体の約40%いることが明らかとなっており、その数は決して少なくはないのである。

## 2. 研究の目的

本研究は、将来のスポーツ指導者候補であるスポーツ系大学生の指導に対する意欲とジェンダー意識の実情を明らかにし、女性スポーツ指導者の登用促進のための基礎資料を得ることを目的とした。なお本研究では、女性スポーツ指導者の内的障壁に焦点をあて、男性と比較して女性の自信のなさに関してスポーツを効果的に指導することに対する自信(Feltz et al., 1999)、すなわちコーチング効力感と社会におけるジェンダー意識として平等な男女の役割・資源分担のあり方、すなわち性役割態度(鈴木, 1994)を検討する。

## 3. 研究の方法

### 1) 調査対象者

スポーツ系 A 大学 3 年生(男子 205 名、女子 71 名、20.01 ± 0.19 歳)

### 2) 調査方法

履修ガイダンス終了後に無記名式調査票による集合調査法を用いた。3 年生 335 名のうち調査趣旨に同意した学生 277 名から回答を得た(回収率 82.7%)。本研究はびわこ成蹊スポーツ大学学術研究倫理審査委員会の承認を受けて調査を実施している。

### 3) 調査項目

調査対象者の属性

性別、年齢、過去の出場大会、現在している実施スポーツ種目

スポーツ指導に関する項目

これまでのスポーツ指導経験、スポーツ指導をしている(いた)対象、将来のスポーツ指導希望、現在までにスポーツ指導を受けたスポーツ指導者の性別

コーチング効力感尺度

コーチング効力感は、スポーツを効果的に指導することに対する自信を測定する尺度(Feltz et al., 1999, 町田他, 2012)であり、24 の項目で構成されている。回答は1(全く自信がない)から5(非常に自信がある)のリッカート法を用いた。

性役割態度尺度(平等主義的性役割態度スケール)

性役割態度尺度は、“男は仕事、女は家庭”といった性別役割分業に対して、好意的かあるいは非好意的に測定する「性別役割態度尺度(SESRA-S)」(鈴木, 1994)であり、15 項目で構成されている。回答は、1(全く思わない)から5(全くその通りだと思う)のリッカート法を用いた。

## 4. 研究成果

### 1) 対象者の属性

調査対象者は男子 74.3%、女子 25.7%とスポーツ・体育系大学の特徴である男子の割合が高い。現在実施している種目は、ここでは団体種目および個人種目の2つに分類したところ、団体種目 68%、個人種目が 32%であった。次にこれまでに出場した大会を尋ねたところ、全国大会以上 33%、全国大会未満(エリア大会、都道府県大会、地区大会などを含む) 67%であった。

またスポーツ指導に関する項目として、これまでのスポーツ指導経験、将来のスポーツ指導希望についてみると、これまでにスポーツ指導経験をもつ者は 23.6%、その経験をもたない者は 76.4%と、圧倒的に指導経験を持たない者が多いことが分かった。将来のスポーツ指導希望については、したい 48.8%、したくない 10.9%、どちらとも言えない 40.3%であり、約半数の者が将来スポーツ指導することを希

望していることが分かった。

## 2) 性別によるスポーツ指導に関する意識の違い

### スポーツ指導経験

過去から現在までのスポーツ指導経験の有無を男女で違いがあるのか見るため<sup>2</sup>検定を行なった。その結果、性別で特に有意差は見られず( $\chi^2(1, N=258)=0.015, n.s.$ )、男女ともにスポーツ指導経験をもつ者が少なく、全体の7割を占めた(表2)。性別に関わらず、スポーツ指導については大学進学を機に指導を始める者が多いと考えられ、したがってその経験が少なかったと思われる。

### 将来のスポーツ指導希望

これまでのスポーツ経験とは別に将来のスポーツ指導希望の有無と性別について関連性を見るため<sup>2</sup>検定を行なった。結果として性別による有意差は認められなかった( $\chi^2(2, N=258)=0.265, n.s.$ )。男女ともに将来、スポーツ指導を希望する者が約半数であることが分かった(表2)。この結果から、先行研究(順天堂大学, 2013)にもあるように、女子もスポーツ指導希望のニーズは一定数あることが示唆された。

### 将来のスポーツ指導形態

前述の将来のスポーツ指導を希望した者に対し、さらに将来のスポーツ指導形態、すなわち有償および無償によるスポーツ指導の希望について質問した。それと性別について関連性を見るために<sup>2</sup>検定を行なった結果、有意差が認められた( $\chi^2(3, N=228)=11.481, p<.01$ )。

次に、特にどの回答に性差が見られたのか確認するため調整された残差を算出したところ、“有償がよい”で男女差が見られ、男子は有償によるスポーツ指導を希望する者が有意に多く(49.1%)、女子はそれを希望する者が有意に少ないことが分かった(26.3%)(表2)。すなわち、女子は男子と比較してスポーツ指

導を将来の職業として考えている者が少ないと推測され、このことはトップアスリートやそれらに連動するアスリートの指導場面への女性登用を促進する際に消極的に作用することが懸念される。

### 過去に指導を受けたスポーツ指導者の性別

過去に指導を受けたスポーツ指導者の性別について、性差との関連性を見るために<sup>2</sup>検定を行なった。その結果、ここでも有意差が認められた( $\chi^2(1, N=275)=34.018, p<.001$ )。将来のスポーツ指導形態と同様に性差の見られた回答を確認するため、調整された残差を算出した。その結果、男子が受けた指導は、全て男性である割合が有意に高く(69.1%)、一方女子が受けた指導は、全て女性もしくは男女両方のスポーツ指導者である割合が有意に高いことが分かった(70.4%)。現在のスポーツ指導者が圧倒的に男性であることを考慮すれば、男子の結果は当然と言えよう。しかしながら、女子は全て女性あるいは男女両方のスポーツ指導者を経験しており、このことがスポーツ指導を希望する契機やスポーツ系大学を希望した契機に繋がっているように思われる。例えば女性のスポーツ指導者は、女子選手に対してスポーツ指導を勧める傾向があると報告されていることから分かるように(Werthner, 2005)、女子にとってロールモデルとなる女性スポーツ指導者の存在は非常に重要であることが示唆された。

## 3) 性別によるコーチング効力感

本研究では、コーチング効力感を Feltz et al. (1999) のスポーツを効果的に指導することに対する自信、とした。スポーツ指導者の効力感は、実際のスポーツ指導、スポーツ指導に費やす時間、指導される選手の効力感、選手のパフォーマンス等に関連があることが報告されており(Feltz et al., 1999; Feltz et al., 2009)、コーチング効力感はスポーツ指導者自身だけ

なく、選手にも影響する重要な要素といえる。

コーチング効力感と性差についてt検定を行なったところ、有意差が見られた( $t(118)=5.68, p<.001$ ) (図1)。結果として、女子の得点は男子よりも有意に低く、女子は男子よりもスポーツ指導において効力感を低く見積もる傾向あることが明らかになった( $t(120)=5.68, p<.001$ )。同様の結果は、すでにいくつか報告されており(Lirgg et al., 1996; 町田他, 2013)、今後、女性スポーツ指導者の登用と促進を推し進めていく上で女性のスポーツ指導における効力感の向上は、重要事項と言える。

#### 4) 性別によるジェンダー意識

本研究では、社会における平等な男女の役割・資源分担を検討する性役割態度尺度(鈴木, 1994)によって男女のジェンダー意識についてその性差を検討した。性役割態度における研究では、“男は仕事女は家庭”で表現される男女の役割分担に対する賛否を問う尺度がいくつか開発されており(東・鈴木, 1991)、わが国では鈴木(1994)の性役割態度尺度(平等主義的性役割態度スケール)が多くの研究で用いられている。その性役割態度を性別によって比較するため t 検定を行なった。その結果、男子の得点が女子よりも有意に低く( $t(253)=4.54, p<.001$ )、男子は女子と比較して男女にける平等意識が低いことが示唆された(図 2)。このことは、単に男子のジェンダー意識が女性と比較して低いことを表わしているだけでなく、今後、彼らがスポーツ指導の場面に置かれた際に、こうしたジェンダー意識が何らかの形で作用することも考えらえる。すなわち、スポーツ指導の現場は圧倒的に男性が多い現状を鑑みると、これからスポーツ指導を志す大学生の性役割態度、特に男性において伝統的であるという今回の結果は、女性スポーツ指導者の登用や促進においてマイナスに作用することが懸念される。

#### 5) まとめ

本研究では、将来のスポーツ指導者候補であるスポーツ系大学生の指導に対する意欲とジェンダー意識の実情について把握するため、性別による比較検討を行ない以下の点が明らかになった。

スポーツ指導に関する意識の違いについては、スポーツ指導経験および将来のスポーツ指導希望において特に性差は見られなかった一方で、将来希望するスポーツ指導形態において女子は男子と比較してスポーツ指導を将来の職業として考えている者が少なく、トップアスリートやそれらに連動するアスリートの指導場面への女性登用において消極的に作用することが心配される。また、過去に指導を受けたスポーツ指導者の性別については、男子が受けた指導は、全て男性である傾向が高く、女子が受けた指導は、全て女性もしくは男女両方のスポーツ指導者である傾向が高いことが明らかになった。このことは、女子にとって全て女性あるいは男女両方のスポーツ指導者経験がスポーツ指導を志す契機に繋がっているように思われ、彼女らにとってロールモデルとなる女性スポーツ指導者の存在は非常に重要であることが示唆された。

性別によるコーチング効力感については、女子は男子よりもスポーツ指導において効力感を低く見積もる傾向あることが明らかになり、今後、女性スポーツ指導者の登用と促進を推し進めていく上で、女性のスポーツ指導における効力感の向上が重要であることが示唆された。

性別によるジェンダー意識について検討したところ、男子は女子と比較して性別に対する平等意識が低く、このことは、将来、彼らがスポーツ指導の場面に置かれた際に、こうしたジェンダー意識が何らかの形で作用することが懸念される。

以上のことから、今後、女性スポーツ指導者の

登用を促進するためには、男性スポーツ指導者の育成とは異なったアプローチで女性スポーツ指導者を計画的あるいは政策的に育成する必要があると思われる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1 件)

佐藤馨(2016 年)スポーツ系大学生のスポーツ指導意欲とジェンダー意識に関する研究  
スポーツ指導における男女の違いに着目して、日本体育学会第 67 回大会体育社会学専門領域発表論文集 第 24 号、202-207

[学会発表](計 2 件)

佐藤馨(2016 年)スポーツ系大学生のスポーツ指導意欲とジェンダー意識に関する研究  
スポーツ指導における男女の違いに着目して、日本体育学会第 67 回大会予稿集、61

佐藤馨、望月聡(2017 年)、女性スポーツ指導者登用促進のための社会心理的要因の検討、京都滋賀体育学会第 146 回大会プログラム、4

[図書](計 0 件)

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等

佐藤馨(2017)「東京へ育て女性指導者」,  
『京都新聞』2017年5月23日付朝刊,17(19)

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

佐藤馨(SATO, Kei)

びわこ成蹊スポーツ大学・スポーツ学部・准教授

研究者番号:50326592

(2)研究分担者

なし ( )

研究者番号:

(3)連携研究者

なし ( )

研究者番号:

(4)研究協力者

望月聡(MOTIZUKI, Satoshi)

びわこ成蹊スポーツ大学・スポーツ学部・教授